

# IIAS NEWSLETTER

International Institute for Advanced Studies

June 2009

# 66

 財団法人  
国際高等研究所

<http://www.iias.or.jp>

## INDEX

報告	研究活動報告(4月1日~5月31日)
挨拶	財団法人国際高等研究所 所長に就任して 尾池和夫
報告	2009年度科学研究費補助金(特定奨励費)交付決定 2009年度第1回企画委員会を開催(5月15日~16日)
紹介	2009年度研究プロジェクト一覧 2009年度フェロー・学術参与
報告	高等研報告書0809「電子系の新しい機能」を刊行(3月31日) 春の高等研イベント実施報告(3件)
紹介	研究プロジェクト「文化財保全技術」 研究代表者 志水隆一
案内	2009年度刊行予定の高等研報告書
IIASカレンダー	●研究活動(6月1日~8月31日) ●理事会・評議員会 ●公開講演会
お知らせ	●「夏期エコスタイル運動」の実施

## 報告

### 研究活動報告(4月1日~5月31日)

#### 研究プロジェクト

研究プロジェクトのタイトル	開催日	研究代表者	参加者数
ナノ物質量子相の科学	4月11日(土)	金森順次郎	11
近代精神と古典解釈:伝統の崩壊と再創造	4月17日(金)~18日(土)	手島 勲矢	15
文化財保全技術(第1分科会)	4月30日(木)	志水 隆一	6
18世紀における世界観の多次元的交錯	5月8日(金)~9日(土)	石川 文康	14
文化財保全技術(幹事会)	5月13日(水)	志水 隆一	9
文化財保全技術	5月13日(水)	志水 隆一	28
2009年度第1回企画委員会	5月15日(金)~16日(土)	尾池 和夫	32
フェロー研究会「Understanding Conflict of Laws 研究会」	5月22日(金)	松岡 博	4
エネルギー科学における多階層連結コンピューティング	5月22日(金)~23日(土)	三間 園興	23
受容から創造性へー近現代日本文学におけるスタンダードの場合ー	5月29日(金)~30日(土)	ジュリー・ブロック	16



所長  
尾池 和夫

2009（平成21）年4月1日、財団法人国際高等研究所所長に就任しました。2008年9月末までは国立大学の運営に従事し、教育と研究と社会貢献を仕事の合言葉にしておりましたが、この研究所に来て、研究に専念する場であるということの意味を、あらためて噛みしめています。

世界は今、イノベーション人材を求め、産業の競争は国際化し、資源、エネルギー、地球環境、持続可能な社会の実現というような地球規模の人類の共通課題を持つ時代にあります。その中でこの研究所に求められるものは何なのかという大きな問いを持って、身に余る大役と心得つつ就任しました。私の専門分野は地球科学の分野ですが、上に述べた人類の共通課題の基盤は地球あるいは宇宙という人類の住む場であります。そのことを意識して、2009年4月から新しく「天地人—三才の世界」と題する研究プロジェクトを代表者となって立ち上げました。これは自らの実践を通じて国際高等研究所の役割を充実させいくヒントを得ることを狙っているものでもあります。

国際高等研究所は基礎研究を行う場所ですが、どのような基礎研究を中心とするかを私は考えてきました。\*吉川弘之さんは、基本法則、基本原理を発見しても、それだけではすぐには製品化に結びつかないような従来型の基礎研究を「第1種基礎研究」と呼び、そのような研究と製品開発の間に、製品化につながるための多様な知識の集積、合成をシステムティックに行う研究を「第2種基礎研究」と呼ぶことを提唱されました。これは「応用研究」とか「目的基礎研究」と呼ばれてきた分野の見方を変えたものと言えるかもしれません。ともあれ、問題解決型の研究活動をも基礎研究と捉えるべきだという吉川さんの主張が、たいへん現代に合ったものであると私は思っています。

このような考えを基本にすると、国際高等研究所で行う研究の姿が見えてくると思います。第1種基礎研究にしても、第2種基礎研究にしても、近未来の人類のためにどのような課題を設定して研究を進めるべきかということを考えている必要があります。新しい研究課題を設定するまでの過程の中に、世代を超越し、既存の研究分野を越えて、自由な発想にもとづく活発な議論の中から大きな飛躍が生まれる時があり、その時を意識して創り出す仕組みが必要です。それを吉川さんに見習って私は仮に「第0種基礎研究」と呼んでみようと思います。

研究の場には、大学のように教育、研究、社会貢献を総合的に進める場や、国策によって目的を置いて研究を行う国立の研究所、製品を生み出すという目的を持つ企業の研究所などがあります。これらの場で行う研究の課題の新しい芽を生み出すのが、まさに国際高等研究所に与えられた使命であると思います。このように考えると、設立のときに描かれた「何を研究するかを研究する」という表現の意味が、私なりに

\*吉川弘之氏：（独）産業技術総合研究所 最高顧問  
元 東京大学総長

「第0種基礎研究」という呼び方で理解できるように思います。このような研究活動を行う人材を広く求めることも今後意識的に実行しなければと思っています。

また、新しい課題を生み出すとしても、その議論の蓄積や、議論の中から得られた学問分野相互の理解や知の共有の成果が、多くの人びとに見えなければ、貴重な宝が生きてこないということもあるでしょう。国際高等研究所の中で行われている研究を市民に見えるように、広報の機能を充実するということが、現代の世界の要請であり、それも私に与えられた役割であると思っています。

先人たちの積み上げてきた知の蓄積に含まれる深い意味がわかるまでには、それ相当の経験と時間が必要だと思いますが、国際高等研究所に集まる高度の知の出会いに触れながら、人類の未来に貢献していきたいという思いを強くしています。

従来にもまして、皆さま方の強力なご支援とご協力をお願いして、就任のご挨拶といたします。

2009年6月16日

## 報告

### 2009年度科学研究費補助金（特定奨励費）交付決定

本年度科学研究費補助金（特定奨励費）について、「近未来社会の課題解決のための研究共同体活動の展開」を包括的課題として、新たな3年間の研究事業への補助金の交付申請を行っていましたが、5月20日付けにて文部科学省から交付決定通知がありました。本年度交付額は2,230万円。

## 報告

### 2009年度第1回企画委員会を開催（5月15日～16日）

2009年度第1回目の企画委員会が、企画委員、上級研究員、研究代表者、フェロー等32名が出席して5月15日～16日に開催されました。今回は、尾池和夫所長就任後初めての企画委員会であり、まず出席者全員が専門や研究の進め方などについて自己紹介を行ない、尾池所長から2008年度の研究事業の概要説明がありました。続いて、国際高等研究所の研究事業のあり方と進め方について、2009年度の科学研究費補助金「特定奨励費」の申請に係る審査結果や、特定奨励費に対する今後の取り組み方などと併せて議論が交わされました。



第1回企画委員会



本研究所の研究プロジェクトのテーマは、大まかには図の□で囲んだ研究対象で分類されています。価値、情報及び制度で表現したように、これらを研究する時、共通に用いる目的、概念を通じて相互に関連して分類が明確にできない研究や全ての分類にかかわるメタサイエンス的研究もあります。

2009年度においては、前年度からの継続プロジェクトに加え、新規プロジェクトをスタートすることとし、下記のとおり継続13プロジェクト（第4年次3、第3年次6、第2年次4）及び新規8プロジェクトの計21プロジェクトを推進しています。

研究対象及び研究プロジェクト一覧

A.物質と光

- ① メタマテリアルの開発と応用（新規3年計画、第1年次）  
研究代表者：石原 照也（東北大学大学院理学研究科教授）

---

- ② ナノ物質量子相の科学（第2年次）  
研究代表者：金森順次郎（上級研究員／大阪大学名誉教授）

B.文化と社会

- ① 受容から創造性へー近現代日本文学におけるスタンダードの場合ー（新規3年計画、第1年次）  
研究代表者：ジュリー・ブロック（企画委員／京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授）

---

- ② 法と倫理のコラボレーションー活気ある社会への規範形成ー（新規3年計画、第1年次）  
研究代表者：服部 高宏（企画委員／京都大学大学院法学研究科教授）

---

- ③ 18世紀における世界観の多次元的交錯（新規3年計画、第1年次）  
研究代表者：石川 文康（学術参与／東北学院大学教養学部教授）

---

- ④ 近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造（第2年次）  
研究代表者：手島 勲矢（企画委員／同志社大学大学院神学研究科教授）

---

- ⑤ 数量的アプローチによる日本経済の比較的研究（第2年次）  
研究代表者：宮本 又郎（フェロー／関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科教授／大阪大学名誉教授）

---

- ⑥ 女性研究者と科学技術の未来（第3年次）  
研究代表者：伊藤 厚子（フェロー／お茶の水女子大学名誉教授／理化学研究所研究嘱託）

---

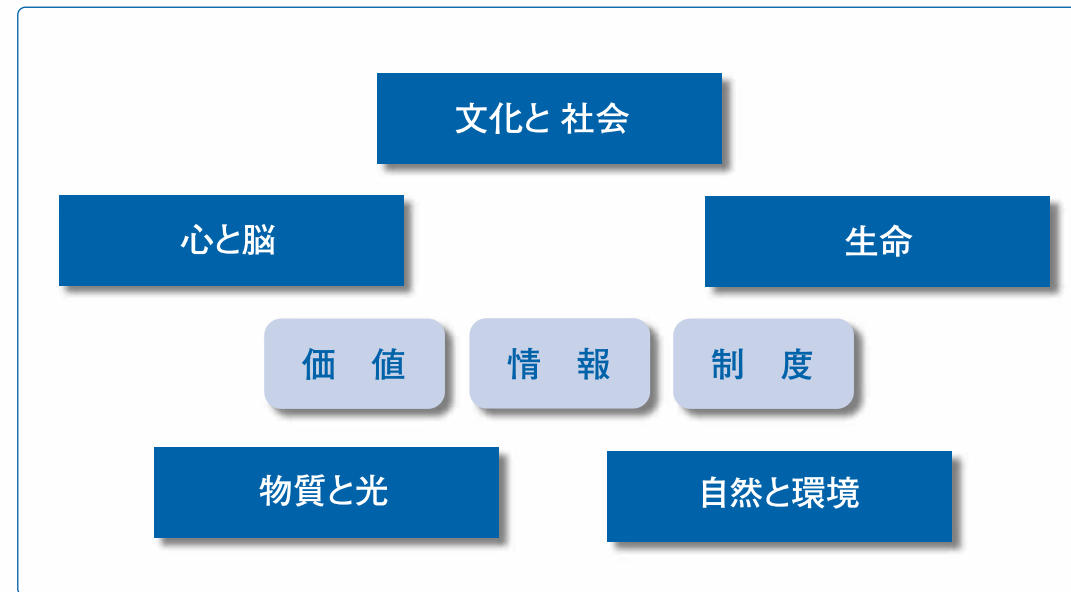
- ⑦ スンマとシステムー知のあり方ー（第3年次）  
研究代表者：亀本 洋（京都大学大学院法学研究科教授）

---

- ⑧ グローバリゼーションと市民社会（第4年次）  
研究代表者：仁科 一彦（大阪大学大学院経済学研究科教授）

---

- ⑨ 生命科学の発展に対応した新しい社会規範の構築（第4年次）  
研究代表者：位田 隆一（京都大学大学院法学研究科教授）



C.心と脳

- ① 21世紀における文化としての設計科学と生産科学（新規3年計画、第1年次）  
研究代表者：岩田 一明（フェロー／大阪大学・神戸大学名誉教授）

---

- ② 絵画と文学に表象される、時間と空間の脳による認識（第2年次）  
研究代表者：近藤 寿人（大阪大学大学院生命機能研究科教授）

D.生命

- ① 細胞履歴に基づく植物の形態形成（第3年次）  
研究代表者：鎌田 博（企画委員／筑波大学大学院生命環境科学研究科教授）

---

- ② 生物進化の持続性と転移（第3年次）  
研究代表者：津田 一郎（北海道大学電子科学研究所教授）

E.自然と環境

- ① 宇宙における生命の総合的考察とその研究戦略（新規3年計画、第1年次）  
研究代表者：海部 宣男（放送大学大学院文化科学研究科教授／国立天文台名誉教授）

---

- ② 文化財保全技術（第4年次）  
研究代表者：志水 隆一（上級研究員／大阪大学名誉教授）

F.総合的研究

- ① 諸科学の共通言語としての数学の発掘と数理科学への展開（新規3年計画、第1年次）  
研究代表者：高橋 陽一郎（企画委員／京都大学数理解析研究所教授）

---

- ② 次世代情報サーチに関する総合的研究（第3年次）  
研究代表者：田中 克己（京都大学大学院情報学研究科教授）

---

- ③ すきまの組織化（第3年次）  
研究代表者：鳥海 光弘（企画委員／東京大学大学院新領域創成科学研究科教授）

---

- ④ 天地人ー三才の世界：宇宙・地球と人間の関わり合いの新しいリテラシーの創造（新規3年計画、第1年次）  
研究代表者：尾池 和夫（国際高等研究所長）

## 2009年度フェロー

高等研において自らの研究や研究者交流を目的として招へいする本年度フェロー(6月26日現在)は前年度からの継続フェロー5名と新任フェロー3名の計8名です。

## 【前年度からの継続】

- 小林 誠 日本学術振興会理事  
高エネルギー加速器研究機構名誉授・  
特別栄誉教授(素粒子理論)
- 合志 陽一 筑波大学監事・東京大学名誉教授  
(工業分析化学)
- 高尾 正敏 大阪大学大学院基礎工学研究科特任  
教授・前パナソニック株式会社中尾研  
究所参事(物性物理学)
- 松岡 博 帝塚山大学法政策学部教授・大阪大学  
名誉教授(国際私法・国際取引法)
- 池原 健二 奈良佐保短期大学特任教授・奈良女子  
大学名誉教授(生命科学・生物化学)

## 【本年度新規】

- 北川善太郎 京都大学名誉教授(民法学)
- 竹本 修三 京都大学名誉教授(固体地球物理学・  
測地学)
- 三間 圀興 光産業創成大学院大学特任教授・大阪  
大学名誉教授(プラズマ物理学)

## 2009年度学術参与

高等研において、所長の諮問に応じ、研究事業の企画、立案及び研究所の運営などについて助言及び提言を行う学術参与(6月26日現在)は1名です。

## 【2008年度委嘱】

- 石川 文康 東北学院大学教養学部教授(哲学)



小林 誠 フェロー



合志 陽一 フェロー



北川善太郎 フェロー



竹本 修三 フェロー

研究代表者  
新庄 輝也

(本書「1.設置目的と運営方針」より 抜粋)～

現代のITはシリコンエレクトロニクスによって支えられているが、その高度集積化は限界に近づいており、早晚壁に直面すると予想されることから従来のエレクトロニクスを超える次世代のエレクトロニクスの実現を目指す研究の重要性が高まっている。本委員会は、電子の持つ「電荷」と、その流れである「電流」、電子系の持つ「電気双極子」、さらに電子の「スピン」ないしは「磁気モーメント」などを同時に制御することにより、省資源、省エネルギー、超高集積、超高速などの次世代エレクトロニクスに必要な高機能性が発現する可能性の調査、研究を目的として設置されたものである。研究対象とする物質には金属磁性体、磁性酸化物、磁性半導体に加え、有機単分子やその集合体、さらに有機と無機の複合体などを幅広く含んでいる。(中略)専門分野としては、磁性を中心とする無機、金属物性学、有機分子物性学、および物質の性質をコンピューターによってデザインしようとする理論研究者に大別される。



## ●高等研報告書0809「電子系の新しい機能」

- ・研究代表者/新庄 輝也
- ・研究年度/2006～2008年度
- ・サイズ/CD版
- ・頁数/本文430頁・価格/450円(税別)
- ・ISBN978-4-906671-67-0

本書にご関心をお持ちの方々にご一読お薦めします。

なお、本書のお申し込みはコピーマート研究所  
TEL/075-315-9923  
FAX/075-315-9368 まで。

春の高等研イベント実施報告(3件)

高等研公開講演会「地震を知って震災に備える～けいはんな地域を中心として～」

5月23日

5月23日(土)、京都銀行協賛による2009年度第1回目の公開講演会を開催しました。講演会には、補助席まで満席となる235名の方々が参加され、地震への関心の高さを感じました。

また当日は、国立国会図書館関西館のご協力により、本講演に関連した資料や書物の展示も行いました。会場では、近畿地方の活断層地図や京都府の地域防災計画、尾池所長の博士論文などが出展され、熱心にご覧になる参加者の姿が印象的でした。

講演後の質疑応答では、地震予知の可能性についての話題がでました。尾池所長は、「現在はまだ地震予報を出すことはできないが、数十年を経て努力することによりできるであろう。それは日本人の悲願でもあり、やらなくてはいけないと思っているし、若い地震学者には是非、地震の予報を出すということを目指して研究を続けてほしい」と期待をこめて、その根拠や理由についても話されました。各々の皆さんが、地震について正しい認識を持ち、これからの備えについて考えるよい機会となったのではないのでしょうか。



尾池和夫所長

以下は、当日のレポートです。

高等研では5月23日(土)公開講演会を実施し、尾池所長が地震の基礎的な知識から防災の心得までを分かりやすく解説した。

講演は、高等研の地学的な立地条件についての説明で始まった。西の生駒断層と東の奈良盆地東縁・井手両断層に挟まれ、造山活動や地震によって山地から流出・堆積した土砂が盆地を形成した。また、日本列島はプレートの移動によって誕生した。今も南からのフィリピン海、東から太平洋の両プレート、大陸のユーラシアプレート、列島の東半分を乗せた北米プレートが押し合っている。

この結果、プレート境界やその周辺、さらには列島地下の岩盤がひずんで壊れ、震動が地表に伝わる。大阪管区気象台の観測では、今年5月11～17日に西日本で519件の地震があった。大半は人が感じないものだが、地下では日常的に岩盤が壊れている。同時に、列島の形も年数センチだが、変化しつつある。

地震の原因である岩盤の破壊は、秒速2キロというスピードで拡大し、その長さが地震の強さ(マグニチュード=M)を決める。28万人の犠牲者を出したスマトラ大津波(04年12月26日)は、破壊距離1300キロ、M9の超巨大地震だった。M8超と予想される次の

南海大地震は、プレート境界付近のひずみが蓄積し、解放される際に起きる。その前後には内陸部で直下型の地震が起きやすい。これまでの発生周期や最近の西日本の内陸地震の発生状況などから、2030～40年に起きると推定される。

「グラツキきたら、身の安全」が防災の基本で、数十秒の強い揺れに耐えることが肝要。そのためには、家屋の耐震補強、背の高い家具の固定などの対策が要る。科学者でエッセイストだった寺田寅彦は、自然災害に高をくくったり極度に恐れたりすることを戒めつつ「正当に怖がることはなかなかむづかしい」と言っている。現象をよく理解することで「正当に怖がる」ことができるのではないだろうか。



国立国会図書館関西館による資料展示



講演会当日 会場風景

皆さまからの声  
(当日アンケートより)

- 身近な場所での地震の発生メカニズムに対して、大変参考となった。今後の自主防災会の活動の参考としたい。
- わかりやすいように工夫された資料と、わかりやすい話し方での講演で、素人の私でもよくわかりました。
- 地震はこわいものだと心配して講演を聞きにきました。でも、身を守ることが一番だと聞き安心感を持ちました。
- 動いていない所が危ない、よくわかりました。
- 平易で、且つ具体的であったので理解しやすかった。
- 思った以上によく理解出来、今後の自身の対応の参考にしたいと思います。
- わかりやすく、ユーモアにあふれたよい講演でした。起きることはやむを得ない自然現象ですが、「予知」を示せる研究をよろしく願います。

第4回合同見学会「IIAS・RITE・OMRON」

5月14日

「来て、見て、知って、なるほど!」

5月14日(木)、本年度も、高等研と(財)地球環境産業技術研究機構(RITE)及びオムロン(株)京阪奈イノベーションセンタ(OMRON)の3機関での合同見学会を開催しました。新型インフルエンザ感染の拡がり懸念され始めたころでしたが、マスク着用や受付での消毒など、ご参加いただいた皆さまにもご協力いただき、無事に終えることができました。

当日、コミュニティホールにて、高等研所在地の木津川地域のコーラスサークル、ゆーゆー男声合唱団とゆりの木コーラスの皆さまによるプチコンサートを開きました。木津川市在住の内藤千津子さまの指揮のもと、楽しい歌声を聞かせてくださいました。

また、高等研茶室「雅松庵」では、お抹茶の点てだしを行い、参加者のみなさまに茶室や縁側で、ひと時寛いでいただきました。



(ゆーゆー男声合唱団)



茶室「雅松庵」にてお抹茶

初めての見学でしたが、素晴らしい施設でした。コーラスもよかったです。

庭園が見学出来てよかった。研究内容はよくわからなかったのでまた次回にゆっくり聞きたい。

高等研へのご意見・ご感想

静かな環境で、研究にはよい所だと思いました。

静かな環境でプチコンサート、抹茶接待もよかったです。

研究の内容がもうひとつわからなかった。

見学会に合わせて研究テーマの発表等があればおもしろいのではないかと考えます。

全体のビデオナリの説明が欲しかった。

整った環境は立派でした。公開についてはどう技術研究を行っているのか?概要やトピックの展示があれば良かった。単なる内見会で価値がなかった。



地域コーラスサークルによるプチコンサート風景(ゆりの木コーラス)

春の高等研イベント実施報告

高等研「雅松庵」茶会を開催  
6月6日

茶道裏千家及び(株)福寿園のご協力を得て、第10回目を迎えます、恒例の茶会を開催致しました。

茶会当日は前日までの雨もあがり、裏千家正教授 本間宗壽先生や社中の皆さまのご協力で、前年を上回る310名の方々にご参加いただき、新緑の下お茶を楽しんでいただくことができました。

新たに設けましたお点前の体験コーナーでは、男性やお子さんの姿も見られ、また、京都府下・奈良県下の高校茶道部の生徒さんも多数参加され、普段はあまり目にする事のないお道具についての説明にも、熱心に聞き入っていました。

また「すきまの組織化」の研究会に参加されていた先生方にも、茶室にて一服していただくことができました。



本席



立礼席/セミナーラウンジ



お点前体験コーナー



本席道具拝見



茶室「雅松庵」を前庭より



本席茶道具



本間正教授と社中の皆さん

研究プロジェクト紹介

「文化財保全技術」 研究代表者:志水隆一

“文化財を守れ”

これまで経済成長がすべてに優先されてきたが、「豊かで持続可能な社会」の構築が分野を超えて志向されている。このような21世紀の潮流にあって、「心の豊かさ」の基盤である文化財の保全・継承もまた、世代を超えて推進すべき責務であろう。

本プロジェクト「文化財保全技術」は、平成18年4月に発足して現在下記の3つの分科会がそれぞれの次の課題に取り組んでいる。

【第一分科会】

- ◎神社、寺院の環境保全状況の現地調査
- ◎人工環境下(博物館、文化財収蔵庫など)における環境モニター用小型センサーの開発と現地検証

【第二分科会】

- ◎敦煌莫高窟の文化財保全のための日中協力事業の支援
- ◎文化財保全に関する国際協力研究についての調査

【第三分科会】

- ◎古墳由来のカビの臭い検出用イオン・モビリティ・スペクトロメータの試作と現地検証
- ◎土壌由来のカビの生態解明のためのデータベース構築

この特別研究プロジェクト発足1年後の平成19年4月より、日本学術振興会「文化財保全技術」に関する先導的研究開発委員会も新たに発足し、国際高等研究所と日本学術振興会の双方からの支援のもとに、59名の専門委員による活発な研究活動を展開している。また、これら研究活動の一環としてすでに

- ◎国際高等研究所公開講演会(平成21年2月28日)  
「アンコール・ワットと国際貢献」講師:石澤良昭委員(上智大学 学長)を開催し、この秋には、

- ◎国際高等研究所・日本学術振興会 共同主催  
「文化遺産保全技術」国際シンポジウム(平成21年10月29日、30日 於:国際高等研究所)を開催する予定である。



●財団法人国際高等研究所  
上級研究員 志水 隆一(2006年12月～)

・専攻分野 応用物理学、表面科学

・学歴・職歴

- 1959年3月 大阪大学工学部精密工学科卒
- 1964年3月 大阪大学大学院工学研究科応用物理学専攻博士課程修了
- 1969年 大阪大学工学部助教授を経て
- 1986年 大阪大学工学部教授
- 1998～2000年 大阪大学超高压電子顕微鏡センター長
- 2000年 定年退官後、大阪大学名誉教授
- 2000～2007年 大阪工業大学情報科学部教授
- 2004～2006年 大阪工業大学リエゾンセンター長
- 1997年～ 日本学術振興会総合研究連絡会議委員
- 2005年～ 文部科学省科学技術・学術審議会専門委員
- 2007年～ 日本学術振興会産学協会理事

・受賞

- 1982年 米国マイクロビームアナリシス学会 学会長賞
- 1983年 井上春成賞(共同受賞)
- 1984年 日本電子顕微鏡学会 学会(瀬藤)賞
- 2002年 米国顕微鏡学会
- Distinguished Scientist Award
- 2006年 応用物理学会 功労賞

No.	研究年度	フォローアップ 研究年度	報告書名	研究代表者
901	2003～2006	2007	学習の生物学(仮題)	星 元紀
902	2004～2006	なし	芸術と社会～芸術表現における伝統と革新の問題～(仮題)	佐々木正子
903	2005～2007	2008	多元的世界観の共存とその条件～閉ざされた世界から開かれた世界へ～(仮題)	石川 文康
904	2003～2008	2009	共同研究の法モデル(仮題)	北川善太郎
905	2005～2008	2009	学術研究機関における学術情報システムのモデル構築(仮題)	北川善太郎
906	2006～2008	2009	19世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究(仮題)	吉田 忠
907	2006～2008	2009	認識と運動における主体性の数理脳科学(仮題)	沢田 康次
908	2006～2008	2009	スキルと組織(仮題)	榎木 哲夫
910	2007～2008	2009	高度計測技術の発展と埋没(仮題)	本河 光博

## I I A S カレンダー

(変更する場合があります)

(6月1日現在)

## ●研究活動(6月1日～8月31日)

■開催予定日	■研究プロジェクトのタイトル	■研究代表者
6月2日(火)～3日(水)	天地人—三才の世界:宇宙・地球と人間の関わり合いの新しいリテラシーの創造	尾池 和夫
6月6日(土)～7日(日)	すきまの組織化	鳥海 光弘
6月11日(木)	文化財保全技術(第1分科会)	志水 隆一
6月12日(金)～13日(土)	諸科学の共通言語としての数学の発掘と数理科学への展開	高橋陽一郎
6月13日(土)	細胞履歴に基づく植物の形態形成	鎌田 博
6月19日(金)～20日(土)	ナノ物質量子相の科学	金森順次郎
6月19日(金)～20日(土)	生物進化の持続性と転移	津田 一郎
6月27日(土)	フェロー研究会「京大地球物理学研究の百年」	竹本 修三
6月30日(火)～7月1日(水)	ものづくりにおける実践知を体得した人材の育成と継承に関する調査研究会	岩田 一明
7月1日(水)	21世紀における文化としての設計科学と生産科学	岩田 一明
7月17日(金)～18日(土)	18世紀における世界観の多次元的交錯	石川 文康
7月17日(金)～19日(日)	宇宙における生命の総合的考察とその研究戦略	海部 宣男
7月24日(金)～25日(土)	メタマテリアルの開発と応用	石原 照也
8月28日(金)～29日(土)	フェロー研究会「大学法人化のもとでの地学教育の現状と将来」	竹本 修三

## ●理事会・評議員会の開催

■開催日	■事項	■内容
6月16日(火)	第65回理事会・第58回評議員会	2008年度事業報告及び収支決算の承認、理事・監事・評議員の選任

## ●公開講演会の開催

■開催日	■講演テーマ	■講師
10月24日(土)	公開講演会「こころを伝えるコミュニケーション」仮題	吉川 左紀子



お・知・ら・せ

## 「夏季エコスタイル運動」の実施

本年も、6月～9月の間、夏季における省エネルギーの推進のため、事務所内の冷房設定温度の目標を28℃とするとともに、その取組みを補完するため、「夏季エコスタイル運動」を実施します。この期間に国際高等研究所にお越しの際は、できるだけエコスタイル(ノー上着、ノーネクタイ)にてお越しいただきますようお願いいたします。

編集・発行者

財団法人 国際高等研究所

事務局長 佐藤 行則

〒619-0225 京都府木津川市木津川台9丁目3番地

TEL : 0774-73-4000 FAX : 0774-73-4005

http://www.iias.or.jp